

## Building lifestyle around Ferrari

# さらば愛しき"自然吸気"V12(仮)

2022年のエンツォ・フェラーリで新開発エンジンとして採用された『F140型』と呼ばれる自然吸気V12エンジン。その役目はもう少しで終わるのかもしれない。



ス ペチアーレモデルとしてエンツォ・フェラーリがデビューしたのは、フェラーリ 55周年に当たる2002年のことだった。あれから20年……と考えると光陰矢の如しであるが、重要なのは、当時初めて搭載された"自然吸気"V12であるF140型が、その役目を終える可能性が出てきたことだ。

カタログモデルでは812スーパーファスト及び812GTSに搭載されるF140GA型が、少量生産モデルではデイトナSP3に搭載されるF140HC型がそれぞれ最新となっているが、フェラーリは2023年、つまり来年までの全モデル電動化を宣言しており、今後純粋な形で自然吸気V12が発表されるとは考えにくい。純粋でない形……と書くと若干語弊があるが、ハイブリッドとして今後もV12が残る可能性はもちろんある。しかしそれぞれの最新が最後になると書いても差し支えがなさそうだ。

そんなF140GA型を搭載する812GTSに、今号では2度も乗る機会に恵まれた。そこで改めて思ったのは、F140型は世界遺産級の素晴らしいエンジンだということ。回転の高まりかたからその音質まで、これほど五感を刺激する機械がこの世に存在するだろうか？ もはや完熟の域に入ったF140型は、少なくとも

も現在新車に搭載されるパワーユニットの中で、"官能的"という言葉が世界で一番似合うエンジンだ。

そして本題からは少し逸れるが、今回それなりの距離を走ることができ、F140GA型と組み合わせるアルミシャシーのよさも体感することができた。路面の入力に対し、軽くて強固で、そしてカーボンモノコックとは真逆のアルミらしく柔らかい、いい意味でボディがたわむのを感じた時、812GTSと"ひとつ"になれた気がしたのだ。これが走行1万kmを超えた個体だからなのかはわからないが、心底惚れ込んでしまった瞬間だった。

さてフェラーリは2022年の75周年に合わせて、記念のロゴを発表した。今年はプロサングエと呼ばれるSUV (FUV) 発表も控えており、忘れられない年になりそう。写真は1947年の創業年にマラネッロで撮影されたとされるエンツォ・フェラーリらだが、目の前にあるのはもちろんV12エンジンであり、75周年という節目の年に、その"魂"とも呼べるV12自体が大きな節目を迎えているのは、時代の流れを感じさせる部分だ。

ということで、『さらば愛しき"自然吸気"V12(仮)』というタイトルをつけさせて頂いたのだが、まだ希望的観測で、2022年の発表なら限定車などの可能性もあるので"仮)"とさせて頂いた。エンツォだけでなく599、GTC4ルッソなど、F140型に感動したことは一度や二度ではない。大事なことなでもう一度書くが、F140型は世界遺産級の名機であると断言したい。

